

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：12602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10316

研究課題名(和文) 超高齢社会において重要な医科歯科連携のための教育教材と評価尺度の開発

研究課題名(英文) Development of educational materials and evaluation scales for important medical-dental collaboration in a super-aged society

研究代表者

山口 久美子 (YAMAGUCHI, KUMIKO)

東京医科歯科大学・統合教育機構・准教授(キャリアアップ)

研究者番号：90376799

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 超高齢社会において、全身疾患と口腔領域の疾患を共に有する患者が増加している。

本研究では医師10名、歯科医師10名に「超高齢社会において医科歯科連携のために卒前の医学生にどのような教育が必要であるか」について聞き取り、回答を解析した。両者から得られたテーマの多くは共通しており、お互いの専門性を知りリスペクトすること、医師も口腔内に関心をもつこと、患者自身や家族を含めたチームで診療する重要性、学生の頃からの連携の経験などがあがった。

今後は医学生の口腔への関心を喚起するとともに、よりよい連携の具体例を経験できる学習機会を充実させることが必要であることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

超高齢社会において、全身疾患と口腔領域の疾患を共に有する患者が増加している。さらに、高齢者の口腔機能を維持するために医科と歯科の連携の重要性は増してきている。歯科医師は医師と同様に「診断・治療を行う」職種であり、医科と歯科の連携においてはケアを中心に考える患者中心の多職種連携の場合とは異なったアプローチが必要であると考えられる。

本研究では、今後は医学生の口腔への関心を喚起するとともに、よりよい連携の具体例を経験できる学習機会を充実させることが必要であることが明らかとなった。この成果をもとに医学・歯学教育カリキュラムを充実させることが日本の医療のさらなる向上につながると考えられる。

研究成果の概要(英文)： In the super-aged society, the number of patients with both systemic and oral diseases is increasing. In this study, 10 physicians and 10 dentists were interviewed about "What kind of education is needed for medical students before graduation for medical-dental collaboration in a super-aged society?" and their responses were analyzed. Many of the themes that emerged from both were common: knowing and respecting each other's expertise, physicians also taking an interest in the oral cavity, the importance of working as a team, including the patients themselves and their families, and the experience of working together since they were students. It is clear that in the future, it is necessary to stimulate medical students' interest in the oral cavity and to enhance learning opportunities for them to experience specific examples of better collaboration.

研究分野：医学教育

キーワード：多職種連携教育 医科歯科連携教育 超高齢社会 卒前教育

1. 研究開始当初の背景

超高齢社会において、全身疾患と口腔領域の疾患を共に有する患者が増加し、さらに、高齢者の口腔機能を維持するために医科と歯科の連携の重要性は増してきていた。医学生・歯学生が卒業時まで身に付けておくべき、必須の実践的診療能力(知識・技能・態度)に関する学修目標等を示した「医学教育モデル・コア・カリキュラム」、「歯学教育モデル・コア・カリキュラム」は平成13年3月に策定されたのち、平成19年12月、平成23年3月、平成29年3月に改訂されてきた。平成29年3月の改訂では、今後チーム医療等が推進される観点から医科と歯科の教育において「基本的な資質・能力」を共有し、「多様なニーズに対応できる医師の養成」及び「多様なニーズに対応できる医師の養成」をキャッチフレーズとしていた。つまり、医療人における卒前段階の水平的な協調を進め、我が国の医学・医療を改善しようと考えられていた。一方で、国内に82校ある医学部のある大学(および大学校)の中で、医学部と歯学部の両方がある大学は14校と2割以下であり、文部科学省の調査によると、近隣に歯学部・歯科大学が存在しないので連携教育は無理であるという意見も認められた。

2. 研究の目的

医学部と歯学部を両方持つ大学においては、学生の間から医学生と歯学生が共に学ぶ機会があり、課外活動などを通じて人間関係の構築も行われている。そのような状況で、医科と歯科の連携がどれくらいあるのかも明らかではない。医学生・歯学生の教育に関わり、医科と歯科で連携をしながら診療する医師から意見を聞き、医学生が卒業前にどのようなことを身につけることで、卒業後の医科と歯科の連携がより良好になるか調査するのが今回の目的である。

3. 研究の方法

学生の教育に4年以上従事した医師・歯科医を10名ずつインタビューの対象とした。医師は、10診療科(内分泌代謝科、総合診療科、血液内科、乳腺外科、救命救急科、麻酔科、整形外科、頭頸部外科、集中治療部、小児科)にて診療をおこなう男性8名女性2名を対象とした。歯科医師は9診療科(口腔外科、歯科総合診療科、義歯科、むし歯科、矯正歯科、歯周病科、小児歯科、嚥下リハビリテーション科、歯科麻酔科)にて診療をおこなう男性7名女性3名とした。

半構造化インタビューにて、1)どのようなときに医科と歯科の連携を行うか、2)医学生が卒業前にどのようなことを身につけることで臨床現場での医科と歯科の連携がより良好になると考えるか、の2点について約30分のインタビューを行った。

4. 研究成果

インタビューの結果は医師の結果と歯科医師の結果に分けて、質的に解析され、20のカテゴリーに分類された。その20のカテゴリーを5つのテーマに分類した。これにより尺度づくりの素材を得ることができた。

5つのテーマである「お互いの専門性を知り、リスペクトする」「医師も口腔内に関心を持つ」「歯科医師と併診することでより良い治療ができる可能性を念頭に置く」「患者・家族とそれらを取り巻く専門職の関わりが求められることを知る」「連携を経験し、連携の客観的な利点を学ぶ」は医師と歯科医師の両者の発言から得られた。

「歯科医師には専門性がある(D1)」「歯科医師のできることに限界がある(D2)」「お互いの専門性を相互理解することが多職種連携である(D3)」「お互いの専門性をリスペクトすることが良い連携につながる(M1)」のカテゴリーからは「お互いの専門性を知り、リスペクトする」のテーマが導き出された。「医師になるにあたり口腔内の症状にも知識を持つべきである(D4)」「医師も口腔内の症状にも関心を持つべきである(M3)」の2つのカテゴリーからは「医師も口腔内に関心を持つ」のテーマが導き出された。「医師歯科医師両者が口腔内症状と全身疾患の関連を念頭に置くべきである(D5)」「歯科医師との連携は、病気の予防や早期発見のためにも重要である。(M2)」「全身疾患を持つ患者の治療は医師と歯科医師が併診する(D6)」「全身疾患をもつ患者の治療は医師と歯科医師が併診する必要があることがある(M4)」「全身疾患の治療に先立ち、口腔内衛生と嚥下機能を改善することが望ましい。(M5)」のカテゴリーからは「歯科医師と併診することでより良い治療ができる可能性を念頭に置く」というテーマが導き出された。「患者のより良い治療には医科と歯科だけではない多職種連携が必須である(D8)」「患者のより良い治療には医科と歯科だけではない多職種連携が必須である(M10)」「より良い治療のためには医療者だけではなく患者を巻き込む必要性を知ることが必要である(D9)」「より良い連携のためには患者/患者家族が歯科受診の必要性を理解することが求められる(M11)」からは「患者・家族とそれらを取り巻く専門職の関わりが求められることを知る」のカテゴリーが導き出された。「医科と歯科の連携を経験することが医師になってからの連携の実践につながる(D7)」「専門職の経験が浅い時期に連携することがその後の連携の実践につながる(M6)」「エビデンスがあることで連携が進む(M7)」「システムが作られていることが連携につながる(M8)」「連携が必要なタイミングを見極めることがより良い治療につながる(M9)」からは「連携を経験し、連携の客観的な利点を学

ぶ」のテーマが導き出せた。

医師に特徴的なカテゴリーは「エビデンスがあることで連携が進む(M7)」「システムが作られていることが連携につながる(M8)」「連携が必要なタイミングを見極めることがより良い治療につながる(M9)」であり、歯科医師に特徴的なカテゴリーは「歯科医師には専門性がある(D1)」「歯科医師のできることに限界がある(D2)」であった。

この成果は、2024年度 AMEE(International Association for Health Professions Education)の学術発表会に受理され、発表予定である。今後は医学生の口腔への関心を喚起するとともに、よりよい連携の具体例を経験できる学習機会を充実させることが必要であることが明らかとなった。この成果をもとに医学・歯学教育カリキュラムを充実させることが日本の医療のさらなる向上につながると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Kumiko Yamaguchi, Chiharu Kawakami, Nobutoshi Nawa, Mitsuyuki Numasawa, Kanako Noritake, Janelle Moross
2. 発表標題 What Medical Students Should Learn for Medical-Dental Collaboration in a Super-aged Society
3. 学会等名 International Association for Health Professions Education 2024
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 友和 (Tomokazu KIMURA) (10633191)	筑波大学・医学医療系・准教授 (12102)	
研究分担者	那波 伸敏 (Nobutoshi NAWA) (30617543)	東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・准教授 (12602)	
研究分担者	鶴田 潤 (Jun TSURUTA) (70345304)	東京医科歯科大学・統合教育機構・准教授 (12602)	
研究分担者	川上 千春 (Chiharu KAWAKAMI) (70643229)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授 (32633)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	藤原 武男 (Takeo FUJIWARA) (80510213)	東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授 (12602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関